

## 6 安全管理（リスクマネジメント）

指導者がプログラムを作成したり、実施するときに、見落としがちになるのが安全管理です。下見ですでに予見出来る危険や、現地の状況によって発生する危険など様々な危険が存在します。それらの危険に対してあらかじめ準備できる対策や予防措置は確実に実施したうえで、安全に活動するのも大切なことです。

また、危険回避のためには指導者やスタッフの安全教育を行ったり、事故の発生時の適切な対応方法などをあらかじめ周知しておく必要があります。

### 1 事故発生のメカニズム

安全でない状態×安全でない行為＝事故発生

#### (1) 安全でない状態 —環境的要因—

- ・天候の急変や気象災害 大雨・吹雪・台風・雷・酷暑など
- ・災害等 地震・火事・崖くずれ・増水など
- ・植物等 かぶれ・とげ・花粉アレルギーなど
- ・動物等 イノシシ・クマ・サル・野犬・毒ヘビなど
- ・昆虫等 ハチ・アブ・カ・ドクケムシ・ムカデ・ヒル・ダニ・ツツガムシなど

#### (2) 安全でない行為 —人為的要因—

- ・安全に対する理解と認識が不足
- ・安全に対する知識が不足
- ・危険に対する感受性が不足
- ・必要な能力が不足している
- ・能力を発揮できない
- ・能力があるのにやらない
- ・規律にたるみがあるためにできない
- ・指導・教育が徹底していない



これらの問題は、普段からの訓練と教育で、ある程度対応することができます。普段から行っていないことは緊急の時には役立ちません、常に心がけ、訓練をしておくことが大切です。

## 2 事故発生時の対応

事故発生時の迅速、的確な対応は、事故の被害を最小限にとどめる事ができます。また、被害者に対する救命措置や応急処置が確実に行なえるように、事前の準備と普段からの教育や訓練を行なう必要があります。さらに、緊急時の対応マニュアルを作成して、適宜、見直しを行ったり、活動時には常に携帯をするなど、万全の備えをすることが大切です。

### (1) 事故の発生を誰がどのように連絡をするのか

事故の発生時に患者に付きそう人と、緊急事態を連絡する人などあらかじめ、役割を決めておくことが迅速な対応のためには必要です。さらに、初めての場所で行う場合には、連絡の方法や携帯電話が利用できるのかなどを現場の下見の時に、確認しておいてください。

### (2) 事故の状況を誰が把握してスタッフに指示を出すのか

事故が発生したことの連絡を受けたら、誰が、救急車の手配や現場への具体的指示を行うのか、などの命令系統を確立しておくことが、連絡ミスなどを防ぎ、速やかな救急作業を行うために必要です。

### (3) 他の参加者の安全は誰が確保するのか

事故現場での救助作業中に、他の参加者の安全確保等の対応は誰が行なうのかなど徹底しないと、二次災害の発生を招きます。特に落石、落雷、スズメバチの襲来等の場合は、速やかに現場から離れることが大切です。

### (4) 家族や関係機関への連絡は誰が連絡するのか

被災者の家族や地元の警察などへの連絡を速やかに行なうことも大切な作業です。

### (5) 事故者の搬送方法とルートの確認

下見の時には、救急車両の進入路や被災者の搬出路を確認しておくことが必要です。

### (6) 搬送につき添う人を決めておく

救急車などで病院に搬送する際には付き添って行く人を決めておくことも必要です。付き添って行く人は、被災者の状態などの連絡を、適宜、全体を把握し指示する人等に行ない、全員が情報を共有する仕組みを作っておきましょう。

### (7) 記録を残す

事故の記録や救急活動の記録を残すことが、今後の対策や救急活動の改善などの参考になります。さらに、裁判などの訴訟の際にも大切な資料となります。